

シリーズ

秘蔵写真

# 今は昔の林業

第46回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

## 「裏木曾」その十

### 小谷狩②

水を利用しながら川の本流へ木材を運ぶ「小谷狩」の主役は運材担当の労働者である「日雇」です。日雇は伐採を担当する「杣」とは別の職種ですが、時代や地域により両方を兼ねるという人もあつたようです。「杣」は単独で行う作業が多く最低限の技術を習得するのにも数年の修業期間が必要だとされますが、「日雇」は集団による作業であり経験が浅くとも一緒に働きました。



大正時代頃の木曾谷での日雇達による小谷狩風景。裏木曾でもこれに近い風景が見られたと思われる。



大正時代初め頃、裏木曾の「日雇」のイメージ（「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より）ここで描かれているのは「看板」と呼ばれる役付きの現場監督達であり法被に役職名が見られる

「日雇」は二十人程で一つの組となり「看板」と呼ばれる現場監督の指揮により、運材装置の設営と解体や、鳶口や鳶竿（長い鳶口）やツルといった道具で木材を引っかけ小刻みに運ぶ運材作業を行いました。「看板」の中でも運材の先頭を指揮する「木鼻役人」と殿で後片付

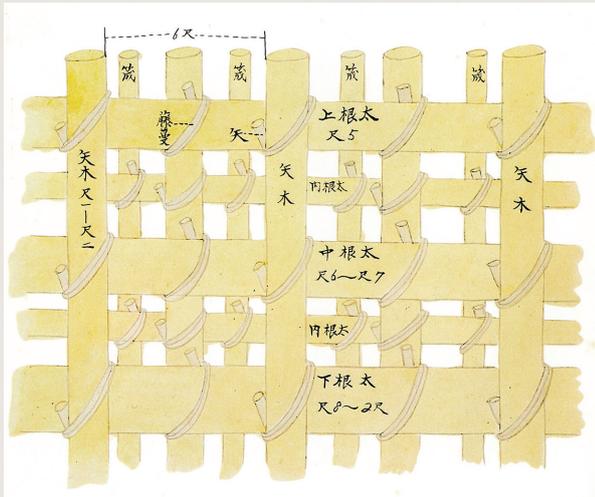


「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より運材を指揮する「看板」のイメージ（大正初期）

けをしていく「木尻役人」は「日雇」の中でも特に技術優秀な者が選抜されてなつたそうです。「日雇」の世界では「看板」になることは経験と技術を持つている証であり名誉なこととされていた一方、責任の伴うものであり、病気で休んだり寒くても焚火にあたる事ができなかったという逸話があります。

なお、「裏木曾」である現在の岐阜県中津川市付知の出身である画家の熊谷守一氏は大正初期頃に付知川の上流域である東股（現在の東濃森林管理署管内・付知裏木曾国有林の辺り）で三年間程「日雇」として働いた経験があり、著書「へたも絵のうち」（昭和四十六年・日本経済新聞社）の中では往時の「日雇」としての経験談が語られています。

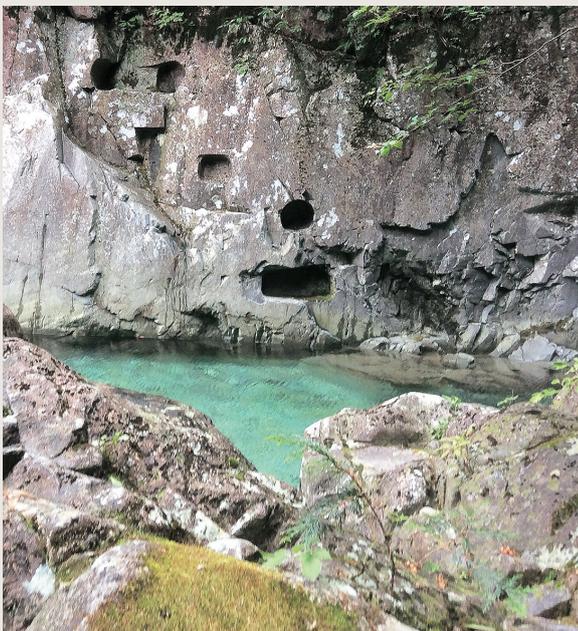
本格的な小谷狩は「大留」と呼ばれる施設から始まります。大留は谷筋で夏・秋の急な出水で木材が下方までバラバラに流出しないように受け止める堅牢な施設であり、谷間で兩岸が岩場である場所が選ばれました。他の運



「大留」の構造図  
 (「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)



裏木曾の「大留」のイメージ  
 (「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)



木曾地域に残る「大留」の遺構。直径一尺四寸から二尺ほどの太い丸太を差し込むための岩に空けられた穴が残っている。「木曾悠久の森」スマートフォン写真コンテストより優秀賞「大留めの遺構も秘めし悠久の森」

材施設が一定の区切りで解体されるのに対して、大留は何年も使われるものでした。「山落とし」でも集めた木を集積・整理する場所である「留」が設置されましたが(第四十三回参照)、大留はそれ以上に頑丈に造られ、急な洪水などで木材が一気に流出することを防ぐ防衛ライイン的な役割を担っていました。ここでは「根太」と呼ばれる長さ一〇メートル程の太い丸太(ヒノキかミズメ)が渡され、川の兩岸の岩に空けられた穴にはめ込まれます。「根太」は上中下の三段に傾斜をつけて置かれ、これに垂直縦方向の「矢」と呼ばれる丸太が藤蔓で頑強に結

び付けられて補強されます。この大留から一本ずつ材木が引き出されて下流へ流されていくことになりましたが、これは概ね十月末から十一月初旬以降の大雨・洪水の少ない季節に入ってから行われるものであったようです。



昭和初期の絵葉書より、当時まだ木曾に残っていたとされる「大留」の跡(現在の木曾森林管理署王滝国有林氷ヶ瀬)「根太」と思われる太い丸太が見られる

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。当サイトへは、コードを読み込んでください。

